

第4次「北九州市子ども読書プラン」に係る全事業の進捗状況 【A:大変順調、B:順調、C:やや遅れ、D:遅れ】

方針	主要施策	取組内容	事業計画(目標)	R3年度～R6年度 取組実績	進捗状況	次期プランに向けた意見 (本取組の継続・廃止、新規事業の有無など)	
Ⅲ市立図書館における読書活動の推進	①読書の「バリアフリー」化の推進	特別な支援を要する子ども向けのマルチメディアデージー図書やLLブックなどアクセシブルな書籍の充実、利用支援の充実、外国籍の子どもに向けた読み聞かせの実施など、読書のバリアフリー化を進める。	・図書館のバリアフリー化、和式トイレの洋式化、ウォシュレット改修	・令和3年度 新門司分館ウォシュレット改修(1ヶ所)他 ・令和4年度 中央図書館、若松図書館ウォシュレット改修(6ヶ所)他 ・令和5年度 若松図書館、大里分館ウォシュレット改修(2ヶ所) ・令和6年度 中央図書館屋外EV改修他	B	・図書館の整備とともに、既存館の改修を進めている。	・今後も次期プランに向けて継続して取り組むこととしたい。
			・図書の郵送貸出	貸出実績(うち18歳以下) ・貸出者数 R3年度229人(13人)、R4年度251人(17人)、R5年度270人(25人)、R6年度281人(21人) ・貸出冊数 R3年度1,094冊(78冊)、R4年度1,282冊(102冊)、R5年度1,253冊(155冊)、R6年度1,149冊(125冊) ※延べ数	B	・障害があるため来館が困難な利用者から好評を得ている。18歳以下の子どもの利用は少ない。	・継続して取組みを行う。
			・特別な支援を要する子どもに配慮した図書の充実(マルチメディアデージー図書、LLブック等) ・外国籍の子ども向け事業の実施(国際交流協会との連携) ・子ども電子図書館の開館及び魅力向上	・毎年度、平均して10冊前後のLLブックや点字図書等を購入 ・令和6年8月と12月に、子ども図書館の「世界の地図と絵本コーナー」で、国際交流協会による多言語読み聞かせを実施 ・令和3年4月に「北九州市子ども電子図書館」を開館	A	・外国籍の子ども向け事業として、国際交流協会と連携し、日本語、英語、中国語、ベトナム語の4か国語で絵本の読み聞かせやワークショップを行い、参加者にも好評である。 ・子ども電子図書館は開館から4年が経過し、乳幼児から大人まで幅広い世代へ向けた蔵書が充実しつつある。	・文化、言語、障害・能力の如何を問わず楽しめるユニバーサル絵本の購入を継続的にを行い、バリアフリーコーナーをより充実させる必要がある。 ・多様な子どもたちの読書を支えるため、今後、多言語による読み聞かせやおはなし会が定着するよう、引き続き、国際交流協会等と協同で事業を進める。 ・電子図書館には、音声が出るものや、文章を読み上げてくれる機能がある図書が多くある。読書バリアフリーの観点からも、今後も電子図書館の運営と蔵書の充実に引き続き取り組んでいく。
	②来館のきっかけづくり	市立図書館に来たことがない子どもや保護者の来館を促すため、趣向を凝らした魅力的なイベントの実施など、来館のきっかけづくりを進める。	・市立図書館での絵本等の読み聞かせ・おはなし会の実施 ・市立図書館全館に家読おすすめコーナーの設置 ・ティーンズ向け図書コーナーの充実 ・季節に応じたイベントの開催 ・読書の枠にとらわれない多分野とのコラボイベントの開催	・市立図書館・分館で図書館司書、読み聞かせボランティアによる絵本等の読み聞かせ・おはなし会を実施 ・令和5年度にティーンズ向け書架を増設し、ライトノベル等を追加 ・「北九州市子ども読書の日」に、いのちのたび博物館や漫画ミュージアム等に参加してもらい、読書と離れたイベントを開催	B	・各図書館では、定期的に読み聞かせボランティアによるおはなし会を実施しており、利用者にとっても毎月のイベントとして定着している。 ・中高生の利用が多い学習室エリアに、ティーンズ向け図書を期限付きで設置したり、ジュニアサポーターのおすすめ本をポップ付きで展示することで、学習目的で来館する中高生に対し、本を手取るきっかけ作りを行った。 ・多分野の施設と連携してイベントを実施することで、普段図書館に足を運ばない子どもや保護者の来館につながっている。	・コロナ禍以降、市立図書館や学校等で活動する読み聞かせボランティアの実態を新たに調査・把握し、ボランティア養成講座の修了者に活動の場を開くとともに、おはなし会の実施曜日の希望など、利用者のニーズに沿った活動ができるように、今後も事業を進めていく。 ・中高生が好む本の調査結果を参考に、ライトノベルや実写化作品の原作等の購入により力を入れ、魅力的なティーンズコーナーを展開するよう取り組んでいく。
			・読んだ本の紹介(読書郵便等)の活動の推進	・市内全ての幼児、児童、生徒に配布する「夏の読書カード」で読書ゆうびんを紹介、募集 ・令和4～6年度の3年間で203通の応募があり、毎年、子ども図書館内に展示	A	・全校児童で取り組む小学校や、教育支援室での取り組みもあり、読書ゆうびんの応募は増加している。 ・送られた読書ゆうびんを子ども図書館に展示することで、それを目的にする来館者も増えている。	・たくさんの人に薦めたい本を郵便はがきで紹介することは、子どもたちの読書活動推進に有益な活動であり、今後も継続することが必要と考える。
	③非来館型サービスの導入など機能の充実	Withコロナ時代の市立図書館の新たな形として、子ども電子図書館の導入や、レファレンス事例集、おすすめ本などの情報のより効果的な発信に努める。	・子ども電子図書館の魅力向上	・市立小・中・特別支援学校の児童生徒に電子図書館利用のためのID及びパスワードを発行し、1人1台のタブレット端末を使い活用してもらった。	B	現在の利用登録者数は約99,000人。一月の平均利用回数は800回～900回で落ち着いている。人気がある書籍は数十人が予約待ちの状態であり、一定数の利用は常に見込まれる。大人向けの図書も充実し、児童生徒以外の一般の方の登録も着実に増えている。	図書館に行くことができない場合でも、24時間どこからでも本が借りられるため、読書バリアフリーの観点からも、今後も電子図書館の運営と蔵書の充実に引き続き取り組んでいく。
			・図書の郵送貸出	貸出実績(うち18歳以下) ・貸出者数 R3年度229人(13人)、R4年度251人(17人)、R5年度270人(25人)、R6年度281人(21人) ・貸出冊数 R3年度1,094冊(78冊)、R4年度1,282冊(102冊)、R5年度1,253冊(155冊)、R6年度1,149冊(125冊) ※延べ数	B	・障害があるため来館が困難な利用者から好評を得ている。18歳以下の子どもの利用は少ない。	・継続して取組みを行う。

④子ども図書館と地区図書館との連携強化	子ども図書館がリーダーシップを発揮し、読書ボランティアの派遣、子ども司書の養成など地区図書館と協力した事業の展開を図る。	・子ども図書館と地区図書館との連携強化(情報交換会の実施など) ・読み聞かせボランティアの情報提供、派遣の実施	・令和4年度より、地区図書館の児童室の担当を集め、情報交換等を行う「児童サービス担当者会議」を実施(各年度に約4回) ・学校等からの要望に応じ、子ども図書館、各地区館から読み聞かせボランティアを派遣 ・毎年、各地区館でのボランティアの活動状況を把握	B	・児童サービス担当者会議を通して、各館の取組についての情報を共有することができている。 ・コロナ禍の影響も収まり派遣件数は増加している(R3年度12件、R4年度56件、R5年度90件)。一方、読み聞かせボランティアバンク登録団体へ学校からの直接要請も多い。 ・令和5年度より、不登校支援センター事業との連携で読み聞かせボランティアを派遣している。	地区図書館との連携、読み聞かせボランティアの派遣とともに、引き続き取り組んでいくとともに、各学校等からの派遣要請に応えられるよう、ボランティアの育成、ボランティアバンクの更新に継続的に取り組んでいく。
⑤読書通帳機の拡充	「読書通帳」をより多くの子どもに利用してもらうため、子ども図書館以外の図書館へ機器の配置の拡充を検討する。	・地区館への配置	令和5年度、ダウンロード版の読書通帳を作成し、子ども図書館のHPに掲載	C	ダウンロード版の手書きの読書通帳のほかに、令和5年度に図書館システムが更新され、マイライブラリーで自分が借りた本の履歴が管理できるようになった。	読書通帳機については、1館または2館のみ設置しても公平性は担保されないこと、また費用等の観点から拡充は困難と判断。このため、図書館システムのマイライブラリー機能や、手書きの読書通帳による履歴管理を案内する。
⑥読書ボランティアなどの育成・支援	市立図書館や学校など市内で活動している読み聞かせボランティアなど読書に関わるボランティアの育成、連携支援に取り組むとともに、図書館職員の資質向上を図る。	・読み聞かせボランティア養成講座など各種講座の開催 ・県立図書館等が主催する各種研修への職員の参加	・専門の講師を招き、毎年度読み聞かせボランティア講座(初級・中級各3回)、及び読書ボランティア講座(ストーリーテリング2回・ブックトーク3回)を開催 ・「子どもと読書」研修会児童図書館入門講座、子ども読書スキルアップ支援事業「スキルアップ講座」への参加(R3) 福岡県立公共図書館等協議会第2回研修会への参加(R4) 読書バリアフリー研修会特別研修への参加(R5)	B	読み聞かせ及び読書ボランティア養成講座は、毎回抽選で参加者を選定するほど人気の高い講座として定着している。	講座の修了者に対し、読み聞かせボランティアとしての活動の場をさらに広げられるよう、ボランティアバンクの整備や派遣先との連携を含め、事業を継続する。
⑦主体的に読書活動に関わる子どもの育成、支援	子ども司書の養成や活躍できる場の提供、ジュニアサポーター制度の発展など、主体的に読書活動に関わる子どもを育成・支援する。	・市内小・中・特別支援学校の児童生徒から読書感想文を募集し表彰 ・子ども司書養成講座の実施 ・子ども読書会議の開催 ・ジュニアサポーターの募集・活動開始	・読書感想文応募総数;R3年度26,576点、R4年度26,094点、R5年度24,535点 ・子ども司書養成講座 R3年度からR6年度で172名の児童生徒が参加し子ども司書として認定 ・令和4年度より子ども読書会議を開催(参加者R4年度20名、R5年度40名、R6年度60名) ・ジュニアサポーター R4年度からR6年度で59名のジュニアサポーターが登録し、子ども図書館で活動	B	・読書感想文は、市内の多くの小・中学校から応募があり、コロナ禍で減少した応募総数も一定数まで回復した。 ・子ども司書養成講座は毎年、定員を上回る応募があり、抽選で選ばれた受講者は貴重な経験の機会を得て熱心に参加した。読書リーダーとして活躍できる子どもたちの育成につながっており、実際に学校において読書活動を広げている。 ・子ども司書養成講座の閉講式後や、ジュニアサポーター全体会議において子ども読書会議を開催し、学校での読書活動を盛り上げるイベント等について話し合った。 ・ジュニアサポーターは毎月1回の活動日を設け、館内サポート、読み聞かせサポート、イベントサポートの様々な活動に取り組んだ。	・子ども司書養成講座、子ども読書会議、ジュニアサポーターの取組みは、主体的に読書活動にかかわる子供を育成・支援するため継続して取り組んでいく。 ・本市読書感想文の募集は令和5年度をもって終了し、令和6年度より市内各校は青少年読書感想文全国コンクールに応募している。
		・学校における「子ども司書」の活用	・子ども司書養成講座をR3年度からR6年度で172名の児童生徒が受講し、全ての受講者が2学期以降に各学校で、おすすめの本の紹介や読み聞かせなどの様々な活動に取り組んだ。	A	・子ども司書養成講座の全ての受講者が自分の学校で読書活動推進リーダーとして取り組み、各学校から活動報告書が提出されている。指導に当たる学級担任、図書館主任、学校図書館職員に講座の内容を周知するなど、情報共有が必要である。	・主体的に読書活動にかかわる子供を育成するため、各学校と連携しながら今後も引き続き取り組んでいく。